【学会レヴュー】

日本宗教学会第66回学術大会

（大崎・立正大学，2007年9月）

高　山　眞知子

『立正安国論』を著した日蓮の宗派の天正年間創設の教育機関にまで遡ることのできる立正大学で，今度の年次大会は開かれた。第一日（9月15日）は，石橋湛山記念講堂における公開シンポジウムで，テーマは「宗教における行と身体」であり，鎌田東二氏（京都造形大学）などの講演が行われた。「身体」というキーワードが如何に流行し関心を集めているかが察せられて興味深く，鎌田氏が壇上で法螺貝を吹かれたお話も面白かった。西行や世阿弥，タイ上座仏教，西欧修道生活の観想や修行についても発表があったが，身体論でありながら女人禁制や肉食妻帯の禁などに言及することが皆無で，主催者の配慮がうかがわれた（が，少々失望した）。

そもそも今年の大会の全体テーマは「宗教 ── 存在の深層へ」であるが，第二，第三日（9月16，17日）は，10部会がそれぞれ約30件の発表と「パネル」を提供した。「パネル」とは特定のテーマをめぐる複数の発表と討論で，各分野でのその時の共通の関心事が反映されやすい。「精神分析の日本的展開 ── 霊性知識人としての精神分析家」として，土居健郎や小此木啓吾や河合隼雄を扱ったパネル，「民衆宗教研究の最前線」，「知識人宗教の問題圏」，「死と死者の表象」などのパネルの他に，本年の大会開催委員会によるパネルとして「「宗教文化士（仮）」の意義と可能性」があった。この後者は井上順孝氏（國學院大）を中心として，ちょうど，心理学で認定心理士，社会学で社会調査士の資格を提供し始めたように，世界のさまざまな宗教現象を宗教文化として公平に理解する能力を養うカリキュラムが在って良いのではないかという提言で，活発な議論が行われ，筆者もとても共感を覚え，我意を得たりと思った。

個別発表にはタイムリーなテーマも多く，一端を紹介すると，「サイバースペースにおける宗教性」今井信治氏（筑波大），「死ぬ権利と自己決定権の理念」金永晃氏（大正大），「合衆国陸軍従軍牧師の性格」田中雅一氏（京大），「宗教とツーリズムの諸相」山中弘氏（筑波大），「現代中国の仏教復興」池上良正氏（駒沢大）など。また大会の全体テーマに沿うものとして，ハイデガー，西田哲学を巡るものもあった。

全体として，宗教学会は，世界的な視野の広がりにも，個人の実存的深層にも，それらを一般大衆に自覚してもらうことにも，関心を持ち，若い世代の研究者を惹きつけつつ，活発に活動しているように思われた。